

COCへの期待と 質疑応答

コメンテーター

山本 綏津子 公益社団法人島根県栄養士会会長

藤原 映久 島根県立大学短期大学部講師

高橋 一清 松江観光協会観光文化プロデューサー

Anticipations for COC and Question and Answer Session

Commentator

Taduko Yamamoto

The Shimane Dietetic Association President

Teruhisa Fujihara

The University of Shimane Junior College Lecturer

Kazukiyo Takahashi

Matsue Tourism Association, Cultural Tourism Producer

矢島 ご発表ありがとうございました。

それでは、続きまして、プログラム4番、COCへの期待と題しましてコメンテーターの皆様方よりご感想、ご意見、ご質問等をいただきたいと思えます。

それでは、お手元のプログラム順に従いまして、まずはコメンテーター、最初のお一方といたしまして公益社団法人島根県栄養士会会長、山本綏津子様よりお話いただきたいと思えます。それでは、よろしく願いいたします。

山本 皆さん、こんにちは。お疲れさまです。

きょう、このCOC事業のコメンテーターということでお招きをいただきましたけれども、本当にこの県立大学の先生方のいろんな部門での研究、また取り組みに関しまして、私たち地域の関連団体といたしましてはすごく期待をいたしまして、今後、このCOC事業の中で一緒にいろんなところで取り組みができれば良いなと思えました。その中で、健康栄養学科で取り組まれています「食を通した島根の活性化」ということとお話がございましたけれども、こういった事業に対しましてやはり期待することは多くて、先ほど副学長の山下先生のほうから専門職に向けてのプラットフォームということで、社会人向け教育プログラムを29年を目標に確立をしたいというお話がございましたけれども、そういったところへぜひ関連団体といたしましては、しっかりと歩調を合わせて取り組ませていただきたいと思えます。

そして、今回、健康学科から食品開発研究ということで島根和牛の食味研究とか、つや姫、西条柿の食品開発研究ということで発表がございましたけれども、やはり島根県栄養士会といたしましては、平成18年度から栄養ケアステーションを設立いたしまして、その中で、例えば外食栄養成分普及事業とか、また島根の行政、農林部のほうですけれども、食材を使いまして、認証制度の中でいろいろ対応させていただいております。例えば県庁食堂等での献立開発等に取り組んでいるところですが、そういったところで今、西条柿についての取り組みもありましたけれ

ども、私たちもまた新しい指導をいただいて、県民の皆様と一緒に新しい素材として提供できれば、それがまた一つの島根の活性化に向けての取り組みにつながるのではないかと思います。ぜひそういったところでも一緒にさせていただきたいと思います。つや姫とか、それから島根和牛につきましても、献立等、今後の活動の中で、取り組みができれば良いと思っております。

また、今後の活動の中で低栄養の高齢者の栄養改善指導とか、それから各地域の年齢別食育と地域地産地消、また特色ある地域特産品、食品開発についてもということで話がありましたけれども、来年度から、栄養士、管理栄養士の質を上げようということで、栄養の指導のための新たな研修制度を開始します。特に、高齢者につきましては、「健康日本21（第2次）」の中で高齢者の指導が重要課題として位置づけられておまして、また、これからは介護度3以上の方でない施設へは入れなくて、介護度1、2の方は地域で、訪問栄養指導とか、そういったところにつながっていくということになっております。そういった中で、この高齢者の栄養指導という取り組みをされますことは、私たちにとっては本当に時期を得た、的を得たとてうれしいことです。ぜひご指導いただきたいと、非常に期待をいたしております。また、各地域の年齢別食育と地産地消につきましても、やはりイベント等で一緒にさせていただいて、栄養士もそれぞれの職域で頑張ってはおりますけれども、やはり後は自分たちばかりではなく、いろいろな関連団体と連携していかなければいけないと思っております。

前日本栄養士会会長の、今は神奈川県立保健福祉大学の学長をしておられます中村先生の話で、アメリカでは6つの学会が一緒になって1週間行われるということを目の当たりにしてきて、いろんな関係団体と一緒にこれからは取り組んでいくことが非常に大事だというお話をされましたけれども、ぜひそういったところで、このCOC事業がこの地域にとりましても本当に期待すべきこと、またこれから効果もあるものと期待

しておりますので、ぜひ今後ともよろしくお願いたしたいと思っております。ありがとうございました。（拍手）

藤原 失礼いたします。本学で主に社会福祉、児童家庭福祉のほうを担当しております藤原と申します。

今、各先生方からすばらしい発表がありまして、今さら私が何かをつけ加えるということは本来必要ないかもしれませんが、実は私はこちらの大学に来る前は児童相談所へ長らく勤めておりました。児童相談所へ15年、それから身体障害者更生相談所のほうで2年でしょうか。主に福祉という分野で働いてきたわけですが、そういう視点から今日の話について少しコメントさせていただければと思っております。

私が働いていた児童相談所では、今、児童相談所は虐待一色という感じもあるんですけども、いわゆる被虐待児と呼ばれます要保護児童でありますとか、あと非行の児童ですね。そして、障がいの児童、不登校の児童、さまざまな問題を抱えた子どもたちの相談支援に当たってきました。そういう子どもたちは、非常に複雑な問題を抱えております。問題は1つではないんですね。子供が持っている障害1つとか、お母さんやお父さんが持っている問題1つ、経済的な問題1つというわけではありません。非常に多くの問題が絡んできます。その多くの問題が絡んだ家庭を支援することは非常に難しいことでありまして、例えば有能な先生が1人、心理士の先生でありますとかドクターでありますとか保育士の先生、有能な先生が1人その子どもと接することができればその子どもを支援することができるか、救うことができるかという、そうではないんですね。実は1人の先生だけではなくて、その子どもは実にたくさんの大人たちと接しているんですね、生活の中で。そして、たくさんの大人が支援しているんですね。1人の先生の力ではどんなに優秀であってもなかなか難しいんです。けれども、たくさんの支援者が手をつないで、同じ方向を向いて、同じ目的を持ってその子どもを支援することができる、な

ぜかこれがうまくいくんですね。でも、それはすごく難しいことなんです。

専門家と呼ばれる先生方は、皆さんそれぞれの意見を持っています。あと、それぞれ違う機関に属しているんですね。違うバックボーンがあるんです。そうですね、連携、連携という言葉、今よく使われるんですけども、「実際に連携するのは本当に難しいな」と現場にいるときに思っていました。いろんなバックボーンを持って、いろんな視点を持った人たちが1人の子どもに対してしっかり固まって応援する、支援をするということは本当に難しいです。でも、これができるとうまくいくんですね。みんなが同じ方向を向いて同じ目的に向かって、そして一人一人がきちんと役割を持って、それもお互いの専門性を尊重しながら、全体の仕事の中で自分はどういう役割を持つのかということをお互いに認め合って、そしてその子どもの支援者、応援団ですね、応援団がうまくでき上がると、何がよかったのかよくわからないんだけどもううまくいくという現象が起きます。

なので、きょう発表にありました、例えばそうですね、2番目の「地域早期支援の仕組みを考える」では、子育て支援ファイルというものが出てきましたけれども、この子育て支援ファイルがそういう応援団づくりのいいツールになるのではないかなと思うんですね。その子育て支援ファイルを使いながら、それを中心に、実は子どもが中心ではあるんですけども、子ども、そしてその子育て支援ファイルを中心に、周りの大人たちがうまくつながって輪になって同じ方向を向く応援団ができる、こういうことができると子育て支援ファイルというのがすごく有効なものになるのではないかなと思いつながら聞いていました。

あと、健康栄養の先生方の発表では、大変おもしろかったです。西条柿も食べたいなと思いました。牛肉も食べたいなと思いました。お米も食べたいなと思いました。実は、食というのは子どもを支援するときもすごく大事ななと思っています。例えば児童虐待の家庭に支援に入るときには、食の問題というのは必ずあります。やはり子育てがう

まくいってない家庭では、子どもの食の問題というのはすごく大きく出るんですね。過食ということもありますし、あととても刺激を好みます。だから、味の濃いものを好んだりします。あと、虐待ではなくて障がいのある子どもさんでも感覚の異常や過敏があったりして、やっぱり食の問題というのは非常にたくさん出てきますね。

食というのは、すごく根幹的であって大事なところなんだなというのはいつも思っていました。そして、食を軸に切り込んでいくと実は意外と話しやすいんじゃないかなと思うんですね、子育ての問題とかですね。「お母さん、その子育てはちょっとね」というのは言いづらいですね。でも、「子どもさんにおいしいもの食べてもらいましょうよ、子どもさんがご飯食べてにこっと笑ったらうれしいよね、お母さん」とか、こういう切り口というのは子育てに困難を抱えている家庭にとってはすごく入りやすい切り口だなと思うんですね。食、まさに生きることにつながるわけですけども、そこを切り口にしながら栄養士さんも応援団の中に入っていたくということが十分できるんじゃないかなと思うんですね。実際、鳥根県の地域の中で、保健師と栄養士が組みながらそういうふうには要保護児童の家庭を支援しているという話も聞いたことがありますね、栄養士も入りながら。

それと、最後の総合文化のほうですけども、まさに子育て支援なんですけれども、地域そのものを子育て支援の基地にしてしまおうと、そんな感じですよ。地域をつくること、地域をまさに子育ての基盤としてつくり上げていくというところですね。これは子育ての応援団の基盤でもあると思うんですね。そういう基盤づくりというところで、ああ、そういうところへ、総合文化の先生方の活動というのは福祉の中でも十分に生きてくる活動なんだなというふうに思って聞かせていただきました。

今日は、本当にすばらしい発表をありがとうございました。(拍手)

矢島 ありがとうございました。

それでは、続きまして、松江観光協会観光文化

プロデューサー・高橋一清様、よろしくお願ひいたします。

高橋 高橋でございます。よろしくお願ひいたします。

島根県立大学にふさわしい、地域に密着した発想がされ、取り組み方にも、それを感じることができました。まだ、始まって一年の段階でしょうから、始めの1歩、2歩のところでしょう。これから2年、3年と続けていくうちに、着実に歩まれ、さらに充実して実りのあるものになることと思います。私は期待を持って見守っていたと思いました。私は最後のグループの活動のありさまをお伺いしたところからの感想を述べることにいたします。そこでは全体にもつながる話題を取り入れてお話しできたらと思っております。

「地域と子どもに関する実践的研究」。この報告は、新聞の記事を見てヒントを得たとの言葉から始まりました。ジャーナリズムが伝える今日の社会全体を視野に入れて、そこからこの地域の場合を見るという視点がこの取り組みの中にあることに注目しました。その報道は日本人の、特に子供の身体能力が低下しているという、ある種の危機意識が日本全体に広がっている、というものでした。それでは、この地域の場合はどうだろうということでの考察です。そこには齊藤孝先生の名前も出てきました。ちょうどそのころ私もジャーナリズムの世界にいて、いち早く子供の身体能力が低下していることを指摘し、それを取りもどすための方法を提案しておられる齊藤先生の文章を、担当していた雑誌に掲げたこともありましたので、この「地域と子ども」の取り組みのそもそもに共感するところがあるのです。齊藤先生と合わせて甲野善紀さんの文章も、私は誌上に掲げました。甲野さんは武術の専門家です。この方は身体論という言葉を使っておられました。両者に共通するのは体の五感を鍛え、感覚を磨き直そうということでした。こうした指摘や発言は世の中全体でうすうす感じていたことに触れるもので、注目を集めました。このように島根の地で始まった「五感を育てる」という言葉で小泉八雲

との接点をつけられたこのプロジェクトは、社会全体の抱える問題にも触れ、大きい意味を持っているのです。

ハーンさんの身体のことを話されました。目について言えば、片方は失明、片方は0.05の視力しかなかった。では、ハーンさんは何を頼りにしたかといえば、まさに、乏しい視力を補う他の感覚、身体能力に頼って感じ、書き、そして生きていたということです。そのことがわかればハーンさんの文学により一層肉薄していけるというところにこのプロジェクトの、いまひとつ重要な意味を発見するのです。声高には決しておっしゃっておられませんが、ハーン文学へのこれまでになかった理解の方法をこのプロジェクトは忍ばせておられるように私は感じました。

そしてまた、地域社会と地域の人たちとの接触の機会を取り入れておられるのも、このプロジェクトの大事な点だと思います。これはある種の体験学習というものでしょう。その場でないと感じられないもの、実際に同じように手がけてみないとわからないことがあるのです。小泉八雲研究では、もちろん作品の読みもありますが、それにも限度があります。体感し、肉感的に受けとめるものが加味されると、さらに大きな発見へつながると私は思います。このプロジェクトではこれまでの小泉八雲研究の上に立った、さらに広く深い素地作りが行われているようにも思い、私は高く評価したのです。

その次の「ふるさと教育の新たな可能性の研究」。これがなされているのは、私のふるさと益田においてであります。出身者として、あの地域であのような組織ができて、あれほどのプログラムを持って取り組みがなされているということを知って、感動を覚えました。そしてなお、これでいいのか、もっと充実したものになるのではないかと自らに問い、試行錯誤していた、そのさ中に島根県立大学のみなさんとの出会いがなされたということにも心を動かされたのです。益田におられる河野先生は、謙虚に自分たちがやっつてることを反省し、その上にさらに実践を積まれておられます。

島根県立大学のみなさんの参加で、このプロジェクトはさらに充実していくと思います。島根県立大学のみなさんは磨かれたご自身の理論、それから実践から得た貴重な経験をどうか益田に生かしてください。そして、新たな方向性を示して具体的な取り組みに参加していただきたいと思いました。

グループの最後の「おはなしレストラン」。これは唯一、岩田先生もお断りになりましたように、聴衆に向い合い、スクリーンに図表や写真や文章を映写しないで、ご自身の言葉で報告されました。これが全てを表していたように思います。生身をさらし、幼児と向い合い、日本語の基礎を作る活動です。まさに、語りかけ、話しかけの実践です。その現場からの貴重な報告が、実感的な言葉で発表されました。このプロジェクトでは、学生の地域貢献とつながっていて、「子供たちの反応が学生を育てた」とおっしゃったこと、そして、子供たち350人の名前を2人の女性司書がすべて覚えている、ということ。これを報告される方が感じられた感動を込めた言葉で語っておられた、このことを評価したいのです。

今日もありましたが、おしなべて今頃の講演会はプロジェクターを使用し、写真を見せ、図表を写して行われます。大学の講義もそうです。レジメと称するものを配り、それをさらにスクリーンに映写して読み上げるのがほとんどです。これだと文字を見ただけで内容が伝わっていきません。人が肉体を通して、感情も交えながら話す言葉は人に伝わり、感動を与えるのです。もちろん必要あってのものと思いますが、それにしても、あまりにもその傾向が強すぎると私は思っています。多分にそのことを踏まえてでしょう、鹿野先生が最後の総括をされたなかで、言葉の重要性を指摘されました。私もここで繰り返しておきたいのです。言葉の力を生かして下さい。言葉の力を生かした取り組みになれば、これからさらに充実したものになると、私は期待しています。

これで私の感想は終わりです。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

矢島 ありがとうございました。

それでは、済みません。お時間が迫っておりますので、ご質問等ございましたら終わりました後に個別にお話しいただければと思います。